

小林 哲也

現代に、人間が絶対的に信じられるものはあるのだろうか。そして、人間は信じるものがなくなると、どうなるのか。人間何を信じればよいのだろうか。この問いは、人間にとっての永遠の課題である。

1883年、ニーチェは『ツァラトゥストラ』はこう言った。の中で、「すべての神々は死んだ。いまや、わたしたちは超人の生まれることを願う」と叫んだ⁽¹⁾。ここで死んだ神々とは、キリスト教の神だけでなく、形而上学的な理念・超越的な理念のすべてを意味している。絶対的な神の死は、神を拠り所としている人間の存在を危うくしたのである。この西欧文明に生きる人間の精神の根柢にできた大きな空洞を、ニーチェは直視して、そして、その恐怖に向かっていた。「彼らの精神を時として見舞った狂気は、このような不安の直接的なあらわれであった。西欧人の自我は支えを失って、崩壊の危機に直面しはじめたのである。」⁽²⁾このような絶対的真理や価値の倒

壊れが「神の死」の宣言として現れたのであり、これまでの真理や価値を信じていた者にとって、このことは巨大な空虚を意味しており、この世界は非常に耐えがたいものであった。

静かな書斎人に見えたステファヌ・マラルメは、何度も精神の危機を乗り越え、実現不可能な全宇宙にも匹敵する偉大な書物を構想し続けた。マラルメの中で精神主義と物質主義とが闘争していたのである。マラルメは『蒼空』の中で「天は死んだ」と叫んだ。これはニーチェの「神の死」をイメージさせる。

マラルメ22歳の作品『蒼空』には、
「永遠の暗黒渡った皮肉が
花のように 元の憂く美しく、
苦しみ不名の砂漠を経めぐって
自分の才能を呪う無かな詩人を苦しめる。」

眼を閉じて逃れながら 横は感じる 蒼空が

威圧的な痛恨の眼で 僕の空虚な心を覗く
めるのを。

どこに逃げよう、と人なまらしい闇を手づ
かみにして、

この悲痛な侮蔑に投げつけるべきか？⁽³⁾

「一天は死人だ—おお物質よ、僕は君に助け
を求める！」

人間という幸福な家畜が横たわっている

この敷藁の上に共寝^{（比喩）}しに来た殉教の徒に
残酷な理想を忘れさせてくれ。⁽⁴⁾

「僕はこり憑かれている。

蒼空！ 蒼空！ 蒼空！ 蒼空！」とある。⁽⁵⁾

そして、マラルメ『エロディード』には、

「私は晴れた蒼空が嫌い！」と書かれてある。⁽⁶⁾

マラルメの詩作のための形而上学、そして
彼が構想した書物の内容とは何だったのた
らうか。

私は、マラルメの『白い睡蓮』の中に彼の
重要な思想があると思う。

「この孤独の域に散らばる穢れなき沈黙を—

嶺のうちに取りますとめ、ちやうど景観^{りほ}の思
出として、そこに忽然と咲き出でて虚ろな白
さで空無を包む睡蓮一才つかずの夢と実現し
ないであろう幸福。人の出現を恐れてここで
凝らしている僕の吐息とによつて作られた空
無を包む魔法の睡蓮の開じた花のひと茎を摘
み取つて出発すること。ひ、きつと、徐々に
オールを返して、何かに当つて夢想が壊れぬ
ように、また僕の退却につれて過巻いてぶく
ぶくと目につく泡が、下意に現われた誰れか
の足元に、僕の拉致する想いの花と類似した
透明な水の花を咲かせぬように気を付けて⁽⁷⁾

この「虚ろな白さで空無を包む睡蓮」、
空無を包む魔法の睡蓮、がマラルメの重要な
思索の到着点だと私は感じている。睡蓮はひ
つじぐさ科の夕年草である。夏、はすに似た
花がさく。はすは、花が咲いた時に実がなる
ことから、仏教では因果俱時^{いがかんじ}の例^たとして、
因果俱時とは瞬間の生命に因と果をそなえて
いることである。うなわち、過去のあらゆる

因が現在の果であり、現在の一瞬一瞬の生活はすべて因となって未来の果を結ぶということの意味している。

ニーチェ哲学の影響を受けたマラルメは、現在、今の一瞬の中に永遠を感じた哲学を詩に表現している。その代表作が『白い睡蓮』である。永遠を詩として、いかにして表現するかを、マラルメは問いかけた。この永遠の中に人間は生きているのである。マラルメは、この永遠の中に生きる人間への葛藤、浄化が、いかにして出来るかを思索し続けたのである。マラルメの哲学は、非常に仏教的だといえる。

キリスト教の立教の根源は、イエスの受肉と死と復活という点である。この事は、すべて神の意志によるものであり、歴史の中で起きた、ただ一度だけの絶対的な事象なのである。そして、復活したキリストが、世界の終末時に再臨し、最後の審判がこなされる。この時、全人類は一人残らず裁かれ、その瞬

間、人類は歴史の中で完結する。これがキリスト教的歴史観であり、歴史の中で決定的出来事が一回だけ生じる不可逆的で直線的に進む時間観である。

ニーチェは、このキリスト教的価値観を否定した。ニーチェは『ツァラトゥストラ』はこう言ったの中で、「結婚、とわたしは呼ぶのは、当の創造者よりさらにまさる一つのものを創造しようとする二人がかりの意欲である。」⁽⁸⁾「すべてのよろこびは—永遠を欲するからだ。」⁽⁹⁾「—よろこびはすべての事物の永遠を欲してやまぬ。深い、深い永遠を欲してやまぬ！」⁽¹⁰⁾と述べた。

マラルメの詩に創造神を否定し、永遠なるものを求めている。マラルメは、ヨーロッパ人が今まで絶対的に信じていた精神的・文化的中枢の神を見失ってしまったことによつて生じた精神の空洞を埋めようとしたのである。

マラルメが『白い睡蓮』を詩作した後、絵

画において、クロード・モネが『睡蓮の池』
を制作した。モネの晩年は睡蓮の絵画の制作
にささげられた。『白い睡蓮』と『睡蓮の池』
が同時代につくられたという事は偶然なの
であろうか。

ここで言えるのは「睡蓮」に関しての作品
は、19世紀のフランスにおいて、絶対的な価
値観がない時に、何を信じるべきなのかとい
う問いに明確に答えることができない状況の
中、産まれたのである。

1894年3月、オックスフォード・ケンブリ
ッジ両大学で、マラルメは『音楽と文芸』と
いう題で講演する。彼は「もし将来フランス
で新しい宗教が現われるとすれば、それは各
個人が求めている天国への本能を石人の喜び
へと拡大することであって、もう一つの脅威。
つまりこのほとばしりを政治の幼稚な水準に
値めることではないでしょう。」と述べた。

私はマラルメはニーチェの「永遠の円環」
を欲する「永劫回帰」を詩作に表現し、「永

の「回帰」の宗教を思索し続けたのではないかと
思う。

現代に生きるわれわれにも、「永遠なものの、
不易なものの」は、必要であり、なくては重要で
ある。これは「われとは何か?」を明確に教
えてくれるものである。21世紀に生きる現代
人のわれわれは、これを求めていかなければ、
人間の精神の空洞は永遠に埋まらないうであら
う。

19世紀の詩人、ポール・ヴェルレーヌは、
『冬は終わりに』で人間の希望を詩にした。
「冬は終りになりよした 老はのどかにいっ
ぱいに、

明るく天地にみまぎって、

どんなにきびしい心でも、

空気の中にちらばったこのよるこびに負か
される。」

人間の精神の冬を、どのようにすれば終わ
らせることができるかは、すべて現代人の生
き方にかかっている。

引用文献

- (1) フリードリッヒ・ニーチェ 氷上英廣訳
『ツァラトゥストラはこう言った』 岩波
文庫 上 133頁。
- (2) 若林真 高島正明 白井浩司 高山鉄男
『二十世紀のフランス文学』 慶應義塾大
学 2頁。
- (3) ステファヌ・マラルメ 佐藤朔訳 『マラ
ルメ詩集』 ぽろぽろ出版 14頁。
- (4) 『マラルメ詩集』 16頁。
- (5) 『マラルメ詩集』 17頁。
- (6) 『マラルメ詩集』 46頁。
- (7) 『マラルメ詩集』 156頁。
- (8) 『ツァラトゥストラはこう言った』 上
117頁。
- (9) 『ツァラトゥストラはこう言った』 下
326頁。
- (10) 『ツァラトゥストラはこう言った』 下
327頁。
- (11) ステファヌ・マラルメ 野口良三訳 『マ

ラルメ詩集 日 審美社

(12) ポール・ヴェルレーヌ 堀口大学訳 日 ヴ
エルレーヌ詩集 日 ほるぷ出版 17頁。

参考文献

奈良弘元 日 宗教学概論 日 日本大学